

静安学社集会と講演について—日本言語学史拾遺(3)

長田俊樹

1. はじめに

「日本言語学史拾遺」と題して、これまで大阪言語学会について述べた(長田2021、2022a)。

大阪言語学会は、東洋学者の石濱純太郎が1942年2月に創立発会した学会である。それ以前に、石濱は1923年に大阪東洋学会を創立し、1927年には静安学社を設立している。

今回焦点をあてるのは静安学社である。

「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」(吾妻2019)によると、「昭和2年(1927)9月 浅井恵倫 笹谷良造 高橋盛孝 Nicholas Nevsky の諸氏と静安学社を発起し幹事となる」とある。しかし、『静安学社通報第一期』によると¹、「浅井(恵倫)、石濱、財津(愛象)、高橋、ネフスキは社員に、神田(喜一郎)、吉田(鋭雄)は社友として学社は成立し」と記されている。つまり、財津愛象が創設メンバーであって、笹谷良造は創設メンバーではない。このことはすでに長田(2022b)で指摘した。また、静安学社の由来や静安学社の創設メンバーを含む、初期メンバーについても長田(2022b)で紹介したので、ここでは繰り返さない。

小論では静安学社集会とそこでの講演を取り上げたい。

大阪言語学会では研究発表という呼ばれ方をしているが、静安学社ではメンバーが発表するのを講演と呼んでいる。下でみるように、第1回講演者がロシアのコンラド博士だったことから、単なる研究発表とせず、講演と呼ぶことにしたのかもしれない²。また、大阪言語学会が例会と呼んでいたのに対し、静安学社では集会と呼んでいる³。小論も静安学社の呼び方にならって、集会と講演を使うこととする。

うえで述べたように、『静安学社通報第一期』(以下通報と略す)が関西大学デジタルアーカイブで原典が読める。また、生田美智子編(2003:36-46)に転載されている。その通報には、第1回から第3回までの集会の様子が記載されている。また、岡崎(1979:1396-1399)には第4回から第16回までの集会が記されている。それに加えて、『静安学社一覧』には昭和12(1937)年度から昭和15(1940)年度の集会の日時と講演者及び講演題目が掲げられている。静安学社で何がおこなわれていたのか。それらを

¹ 現在、『静安学社通報第一期』は関西大学デジタルアーカイブとして、以下のサイトからダウンロードできる。https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/hakuen_bunko/002593904

このサイトの備考には次のような説明がある。「石濱は高橋盛孝、ニコライ・ネフスキー、浅井慧倫、笹谷良造らと中国の学者王国維を記念し東洋学研究を趣旨とする「静安学社」(静安は王国維の字)を発起してその幹事となる」。しかし、すでに指摘したように、『静安学社通報第一期』には笹谷良造の名はない。ネットにアップされている『静安学社通報第一期』を読まずして、この備考は書かれている。大変残念である。

² 桧山真一(2003:26)によると、「筆者が知るかぎり、静安学社の集会で講演をやっているのはコンラドのほか内藤虎次郎だけである」と指摘している。これは何を以て講演と呼ぶかの問題を含むが、『静安学社一覧』をみるかぎり、研究発表については「講演題目」となっている。したがって、小論ではすべての研究発表を講演と呼ぶことにする。

³ 後に指摘するように、「静安学社規約」の「五、本学社は趣旨に本づき左の各項を実行す」とあり、その項目として「イ、集会 ロ、出版 ハ、文庫」があげられている。

まとめて提示するのが小論の目的である。

また、静安学社社員や社友(後にはこの区別がなくなり、社友だけとなった)として名前があるが、発表をおこなわない人もいれば、何度も発表をおこなう人もいて、社友メンバーからみる静安学社の性格と講演者や講演題目から知る静安学社の実態とでは、当然ながら開きがある。小論では、講演者と講演題目を見ることで、その実態に注目して静安学社の活動をみておきたい。

また、小論では静安学社の初期の講演と『静安学社一覧』に掲載された講演の内容について分析考察を試みる。その結果、初期の講演の先見性、先駆性を指摘するとともに、後の講演との相違点をみる。中国古典学や日本古典学に偏ったあまり、大阪言語学会創設に動いたのではないかと。そうした仮説を提示したい。

では、初期の静安学社集会と講演をみていこう。

2. 初期の静安学社集会と講演

第1回から第3回までは通報に掲載されているので、それを引用しておこう。ただし、通報には年号が記載されていないので、年号を西暦で追加している。

第1回集会。1927年9月25日午後1時より懐徳堂にて。

出席者。コンラト(=コンラド)博士、浅井、石濱、財津、高橋、ネフスキ。

報告。発起人石濱提出の学社規約の原案を討議修正して可決し、浅井、石濱、財津、高橋、ネフスキは社員に、神田、吉田は社友として、学社成立した。規約により幹事を公選して石濱、高橋之に営る。ネフスキ当日の客友コンラト博士を名誉社友に推薦せんと提議し満場一致にて賛成可決す。博士は之を受諾して謝意を述べられた。

講演。コンラト博士。サウエトロシアに於ける東洋学研究。

第2回集会。1927年10月30日午後1時より懐徳堂にて。

出席者。浅井、石濱、神田、小林、財津、高橋、ネフスキ、プレトネル、吉田、吉町。

報告。プレトネル(石濱紹介)、小林太市郎(石濱紹介)、吉町義雄(ネフスキ紹介)は社友に加はった。静安先生記念論文集編纂の幹事の提議は採用された。

講演。浅井恵倫、台湾調査予報。

第3回集会。1927年11月27日午後1時より懐徳堂に於て。

出席者。浅井、石濱、神田、熊澤、財津、高橋、ネフスキ、吉田、吉町。

報告。石田幹之助、熊澤猪之助(共に石濱紹介)は社友となった。幹事から東洋文庫からの寄贈の件、至急文庫開設準備の件、論文集の件、出版の件、正月集会の件、今井懐徳堂理事へ礼状の件、を報告議決した。

講演。ネフスキ、台湾曹(Tsou)族語考。

神田喜一郎 祓教雑考

続いて、岡崎(1979)の報告する静安学社の集会と講演をみていこう。9回以降はクエスチョンマー

ク(?)がつけられていて、岡崎自身も確信はもてなかったようだが、日時と講演内容は石濱が残したメモ書きによるものである。煩雑になるので、このクエスチョンマークは省いた。また、年号はすべて西暦で表記した。

第4回集会(1928年1月29日)

石濱純太郎 スタイン蒐集中の回鶻文無量寿宗要経解説
ネフスキ 羅君美の寄せ来れる西夏文仏典解説
小林太市郎 沙腕忌記念

第5回集会(1928年2月19日)

石濱純太郎 王忠愨公遺書・訳注蒙古源流
亀田次郎 ロドリゲス、ホフマン其他の日本文典
プレトネル ヤフェチドロギイ
高橋盛孝 ギリヤク研究

第6回集会(1928年4月29日)

内藤虎次郎 支那近代の地図 特に満洲地方の地図に就て

第7回集会(1928年5月27日)

ニコライ・ネフスキ 西夏文の新資料
石濱純太郎 支那音韻研究の新資料
財津愛象 支那音韻の研究
ネフスキ 西夏文研究より見たる支那の音韻
高橋盛孝 浙江の一方言

第9回集会(1928年9月23日)

高橋盛孝 樺太北海道旅行談
浅井恵倫 紅頭嶼旅行談

第10回集会(1928年10月28日)

ネフスキ 石濱純太郎 西夏文研究予報
石濱純太郎 左伝文選星占の古鈔本
高橋盛孝 近文アイヌの研究

第12回集会(1929年1月20日)

各人研究を持参すべき。通報学報出版の件。

第13回集会(1929年2月17日)

ネフスキ 西夏文法華經第七卷
石濱純太郎 渋江抽齋 開元本校勘気
澤英三 ペルシア語

第14回集会(1929年4月21日)

西田長左衛門 文心雕龍原道篇
亀田次郎 オヤングレンの日本文法

第15回集会(1929年5月19日)

財津愛象 支那音韻考(続)
ネフスキ 題未定

第16回集会(1929年6月16日)

ネフスキ 西夏文パンチャラクシャ研究予報
浅井恵倫 タガログ音韻考
財津愛象 支那音韻考(再続)
高橋盛孝 ギリヤク雑考

以上が岡崎(1979)に掲載された集会と講演である。

3. 初期の静安学社講演者と講演内容の考察

ここまでの静安学社集会、つまり1927年9月から1929年6月まで(昭和二年度と三年度)の集会を初期とみなし、その講演者と講演内容についてみておこう。

まず、初期の講演者をとりあげる。

初期の講演者をみると、静安学社創設メンバーがほとんどである。その回数をあげると、浅井(4回)、石濱(5回)、財津(3回)、高橋(5回)、ネフスキ(8回)(以上、社員)、神田(1回)(社友)である。また第2回集会から参加した小林太郎とプレトネルが各1回ずつ講演をおこなっている。第3回までに静安学社に参加した初期メンバーのうち、講演をしていないのは九州大学に赴任した吉町義雄と東京在住の石田幹之助、そして熊澤猪之助の3名だけである。

初期メンバー以外では、以下の4名が講演をおこなっている。

内藤虎次郎(名誉社友)

亀田次郎(大谷大学教授)⁴

澤英三(大阪外語教授)⁵

⁴ 亀田次郎の詳細な年譜が以下のインターネットサイトにアップされている。ただし、静安学社での発表などは掲載されていない。<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/mokuroku/kameda.htm>

⁵ 澤英三(1896-1978)は大阪外国語学校(後に大阪外国語大学)教授だった方で、大阪外国語大学(現在の大阪大学外国語学部)図書館には澤英三文庫があり、筆者がコピーした『静安学社一覧』はこの澤英三文庫に入っていたものである。生没年については溝上富夫大阪外国語大学名誉教授からご教示

西田長左衛門(浪速高校教授) ⁶

とくに、亀田は2回講演をおこなっている。後述する『静安学社一覧』【昭和七年】(1932)によると、名誉社友の内藤湖南を除く、亀田、澤、西田の3名はいずれも社友(社員と社友の区別はなくなり、全員が社友と呼ばれる)として、名前があがっている。いつから、静安学社の社友になったのかはあきらかではない。

初期の講演内容についても、考察を加えておこう。

静安学社の初期の講演で際立っているのがフィールド調査報告である。それに該当するものを以下に列挙する。

- 第2回集会 浅井恵倫—台湾調査予報
- 第3回集会 ネフスキー—台湾曹 (Tsou) 族語考
- 第5回集会 高橋盛孝—ギリヤク研究
- 第7回集会 高橋盛孝—浙江の一方言⁷
- 第9回集会 高橋盛孝—樺太北海道旅行談
浅井恵倫—紅頭嶼旅行談
- 第10回集会 高橋盛孝—近文アイヌの研究
- 第16回集会 浅井恵倫—タガログ音韻考
高橋盛孝—ギリヤク雑考

ここまで31回の講演があり、そのうちの9回がいわばフィールドワークの報告やフィールドワークによって得られたデータの紹介である。

また、以下のような言語の音韻や文法書に関連する講演も多い。

- 第5回集会 亀田次郎—ロドリゲス、ホフマン其他の日本文典
プレトネル—ヤフェチドロギイ⁸
- 第7回集会 石濱純太郎—支那音韻研究の新資料
財津愛象—支那音韻の研究
- 第13回集会 澤英三—ペルシア語
- 第14回集会 亀田次郎—オヤングレンの日本文法
- 第15回集会 財津愛象—支那音韻考(続)
- 第16回集会 財津愛象—支那音韻考(再続)

石濱や財津の講演を言語学関連とすんなりと位置付けることができるのかは問題だが、これらを含

いただいた。

⁶ 西田長左衛門については、岡崎(1986)に詳しい。

⁷ これをフィールド調査とみなすのは早計かもしれないが、高橋盛孝の志向する方法論がフィールドワークであるとみると、うなずけるのではないだろうか。

⁸ ロシアのマル提唱の「ヤフェト理論」の紹介か。

めると言語学関連の発表が8回ある。

さらに、いわゆる文献学的研究をあげておこう。こうした研究こそが石濱純太郎自身の研究の中心であったことはまちがいない。じじつ、石濱の講演はこの部類に属する。

- 第4回集会 石濱純太郎—スタイン蒐集中の回鶻文無量寿宗要経解説
ネフスキー—羅君美の寄せ来れる西夏文仏典解説
- 第5回集会 石濱純太郎—王忠愨公遺書・訳注蒙古源流
- 第7回集会 ニコライ・ネフスキー—西夏文の新資料
石濱純太郎—支那音韻研究の新資料
ネフスキー—西夏文研究より見たる支那の音韻
- 第10回集会 ネフスキ・石濱純太郎—西夏文研究予報
石濱純太郎—左伝文選星占の古鈔本
- 第13回集会 ネフスキー—西夏文法華経第七卷
石濱純太郎—洪江抽斎 開元本校勘気
- 第14回集会 西田長左衛門—文心雕龍原道篇
- 第16回集会 ネフスキー—西夏文パンチャラクシャ研究予報

これら文献学的研究においても、回鶻文や西夏文など、言語学的知見を必要とするものが多い。

以上、講演を筆者なりに分類して並べてみた。

これら講演から初期の静安学社が目指したものがみえてくるのではないか。以下に、筆者の分析考察を述べてみたい。

まず指摘しておきたいのは静安学社の先駆性、先見性である。何が先駆的で先見的なのか。言語学史を踏まえたいうで説明しておこう。

19世紀の言語学は比較言語学(歴史言語学)の全盛期だ。「音韻法則に例外なし」を掲げた青年文法学派が活躍し、印欧比較言語学における比較方法を他の言語にも当てはめていく。歴史言語学にあらずんば言語学にあらず。静安学社が設立されたのはまさにそんな時代だった。

そうした歴史言語学への偏重をあらためるようになったきっかけを作った本がある。それがソシュール『一般言語学講義』である。「通時的」と「共時的」を区別し、通時的研究と同様、共時的研究の重要性を強調したのがソシュールである。われわれ言語学徒は言語学概論の最初にそう教えられる。ご存じのように、『一般言語学講義』はソシュールの死後、弟子たちによってまとめられ、1916年に出版された。日本語への翻訳は小林英夫によって、『言語学原論』と題して1927年に出版されている。世界に先駆けて、日本語に翻訳された名著だ。このソシュールの翻訳本が出るのと静安学社が成立したのがほぼ同時期である。ソシュールの共時言語学の重要性を指摘する翻訳本が出た時に、静安学社では共時言語学的志向をもったフィールドワークがおこなわれていたことになる。この先見性は注目に値する。

また、静安学社のメンバーがフィールドワークに向かった先は台湾先住民であり、ギリヤーク(現在はニヴフと呼ばれる)やアイヌの居住する地域である。これらの言語は現在「消滅の危機に瀕した言語」(略して危機言語)とユネスコが認定していて、1990年代以降、危機言語研究は言語学のなかで

も関心が高い分野である⁹。危機言語をフィールドワークで記述する。それが静安学社の先駆性なのである。

こうしたフィールド言語学志向は誰によってもたらされたのだろうか。

それはネフスキーと浅井恵倫によって、もたらさせたことはまちがいない。

まず、ネフスキーからみていこう。ネフスキーの評伝を書いた加藤によると、ネフスキーに影響を与えた民族学者としてシュテルンベルグをあげている。加藤は以下のように指摘する。

学生時代のネフスキーにとって、その後の学問的形成に大きな影響を与えたもう一人の学者として、有名な民族学者 L.シュテルンベルグ(1861-1927)をあげなければならない。シュテルンベルグはペテルスブルグ大学の教授ではなく、人類学・民族学博物館に勤務していたが、ネフスキーは博物館で催されるシュテルンベルグのゼミナールに出席して、その講義を聞いた。ネフスキーにおけるシュテルンベルグの影響は、後年彼が行なった民族学的方法、とくに曹族言語の調査方法などに明瞭に見られる。・・・(中略)・・・

シュテルンベルグの研究方法の特徴は、まず研究しようとしている民族の言語から出発したことである。「私は、自分が関心を寄せている民族の真の生活、とくに心理的側面を理解するためには、その民族の言語を徹底的に研究する必要があることを痛感するに至った」と彼は書いている。そして彼は、住民から短い話を聞き、これを音標文字で書き取り、一つ一つの単語の意味を分析し、逐語訳を施し、そこから文法的特徴をつかんだのである。(加藤 2011:33-35)

ネフスキーがシュテルンベルグから多くを学んだことはまちがいない。ネフスキー自身が「故シュテルンベルグ氏」¹⁰を書いていることからあきらかである。ただし、加藤はネフスキーの言語学の学習についてはあまり注目していない。「住民から短い話を聞き、これを音標文字で書き取り」とあるが、これを実行するのは容易なことではない。その方法を習得するには音声学の知識を必要とする。

ネフスキーの言語学の先生はボードワン・ド・クルトネー(1845-1929)¹¹である。ソシユール以前に通時態と共時態の区別を指摘し、音と音素の区別が必要であることを説いた人として、言語学史上に必ず登場する言語学者である。このボードワンとその教え子であるシチュルバ(1880-1944)のネフスキーへの影響について、コンラドの以下のような証言がある。

実は、当時の雰囲気そのものがニコライ・アレキサンドロヴィチの言語学の才能、特に音声学の才能を文字どおり伸ばす恵まれたものであった。きわめて興味深い雰囲気が醸成されていたのだ。東洋学全体、いや、言語学全体を大学で主導していたのは、巨人のボドエン・ド・クルトネであった。まさに彼が有名な音素論を想像したのだ。「音素」という語はまだみずみずしく、新鮮で、興味ぶかく、

⁹ 筆者自身、危機言語に関する著作、ニコラス・エヴァンズ(2013)の翻訳に携わり、その「あとがき」も書いている。危機言語研究に関心のある方はぜひ読んでみてほしい。

¹⁰ 「故シュテルンベルグ氏」はネフスキー・岡正雄編(1971)『東洋文庫 185 月と不死』(平凡社)34-42頁所収。

¹¹ 加藤(2011:22)は「ボードワン・ド・クルトネ」と表記している。生田編(2003:96)では「ボドエン・ド・クルトネ」と記されている。ここではムーナン(1974)『二十世紀の言語学』の表記にしたがって「ボードワン・ド・クルトネー」とする。ムーナン(1974:34-46)にはボードワンの生涯と業績が記されている。

謎めいていた。・・・(中略)・・・しかもボドエン・ド・クルトネの愛弟子の一人で同僚でもあるレフ・ウラジミロヴィチ・シチュエルバは当時若い非常勤講師であったが、大学の大きな建物の、下の階に、突如音声学の実験室を開いた。ああ、それは全くの新機軸だった。全く不可解で、学生たちはこの実験室を、カリガリの部屋を眺めるように見ていた。そこでは何か見たこともないものが渦巻いていた。それはレフ・ウラジミロヴィチ・シチュエルバの指導のもと音声学における大実験の始まりであった。2人の卓越したわれらが中国研究者がこの方式を学んだ。エヴゲニイ・ドミトリエヴィチ・ポリヴァノフとニコライ・アレキサンドロヴィチ・ネフスキーである。

このような全般的な雰囲気はニコライ・アレキサンドロヴィチの言語学、特に音声学の資質を伸ばした。(生田編 2003:96)

われわれがフィールド調査を行う前に必ず身につけておかねばならないのが音声学の知識である。筆者も言語学概論の最初に音声学を習い、国際音声字母 (IPA) を一生懸命覚えたものである。その音声学の知識をネフスキーはシチュエルバから習っていた。だからこそ、フィールドでの音声聞き取りができたのである¹²。

静安学社による危機言語フィールド調査を推進したのはネフスキー一人ではない。浅井恵倫もまたその重要性に気がついていてた。

浅井恵倫は1918年7月に東京帝国大学文学科(言語学専修)を卒業している。1912年から3年間は言語学専修の卒業生はなく、1915年と1916年にも各一人の卒業生しかなかった。また、浅井恵倫の卒業の際も浅井だけしか卒業せず、1919年から2年間も卒業生がゼロだった。しかも京都帝国大学にも言語学の学生がおらず、「まさに言語学科の暗黒の時代であった」(浅井 1969:12)という。しかし、浅井は唯一の学生として、金田一京助など先輩が参加する「言語学談話会」に参加し、「書籍以上に啓発せられ今でも有難いことだった」(浅井 1969:13)と回想している。その言語学科で選んだ研究対象がマレー語だった。

1924年、大阪外国語学校のマレー語学科に職を得て、ネフスキーや石濱たちと出会う。その前年、台湾へ行き、台湾先住民言語ヤミ語の調査をおこなっている。つまり、ネフスキーに出会う以前に、危機言語であるヤミ語の調査をおこなっていたのである。なお、このヤミ語の調査をまとめ、*A study of the Yami language, an Indonesian language spoken on Botel Tobago island* と題する博士論文を書き上げ、1936年、オランダのライデン大学から博士号を授与されている¹³。

また、浅井は音声学にも関心を寄せ、1926年に音声学協会が発足すると、翌年には浅井の主導によって、近畿会員茶話会や大阪例会を開催している。第1回音声学協会大阪例会は1927年5月29日に大阪高等商業学校で開催され、浅井恵倫、石濱純太郎、吉町義雄の静安学社初期メンバーが参加している¹⁴。また、後の大阪言語学会創設メンバーである川崎直一も参加している。第2回大阪例会は1927年7月9日に大阪外語で開催され、石濱や浅井に加えて、ネフスキーも参加し、石濱は大阪方言につ

¹² 塚本善也(2014)は「なぜネフスキイは台湾・ツォウ族村へ出かけたのか：『ツォウ語方言資料』成立前史」と題する挑戦的なテーマだが、静安学社に触れた一節がない。「クマ・ソ言説」や「マーヤ伝説」と結びつけようとするのはいかがなものか。

¹³ この博士論文については、石田幹之助(1936)の書評がある。

¹⁴ 浅井恵倫(1927)「第一回大阪例会記事」による。

いて書かれた藤井玄伸著「世話類聚」という珍本を紹介している¹⁵。まさに、静安学社の第1回集会在開催される二か月前のことである。

従来、静安学社におけるネフスキーの役割だけがクローズアップされることが多く、浅井恵倫の役割についてはほとんど議論されることがなかった。しかし、少数民族のところに飛び込んでいき、フィールド調査をおこない、その言語や民話を採集し文法を書き上げる。つまり、現地調査による言語記述の方法論ということであれば、上で引用した加藤のように、ネフスキーを通したシュテルンベルグの方法論だけが強調されているが、浅井が果たした役割も大きい。

じじつ、オーストロネシア語研究者である土田滋が以下のように指摘している。

しかし、浅井先生はすでにアメリカの人類学・民族学者ボアズによる同じ方法論を知っており、「徹底的な phonetic 主義、texts 主義の必要」(浅井 1953:15)を感じていたから、むしろネフスキーと意気投合したのだと解釈すべきだろう。(土田 1984:6)

加藤(1976:187、2011:165)によると、「ネフスキーは、学校の教師仲間では浅井恵倫ととりわけ仲が良かった」という。それを土田が言語学者の眼から見て、同じ方法論を知っていた浅井が「むしろネフスキーと意気投合したのだと解釈すべきだろう」と指摘しているのである。少数民族言語のフィールド調査に従事する筆者もまた土田と同様、ネフスキーを通したシュテルンベルグの方法論だけではなく、浅井が学んでいた、アメリカ先住民言語の研究者たちの方法論にも注目しておきたい¹⁶。1970年以降に言語学を学んだ我々にとって、シュテルンベルグを学ぶ機会はまったくない。むしろ、アメリカ先住民言語研究者であるボアズやサピアは、今でも言語学史上燦然と輝いている

ネフスキーと浅井のフィールドワーク志向に啓発されたのが高橋盛孝である。

1923年、高橋は東大の支那哲学科を卒業した後、京大大学院に進学した。京大大学院での研究テーマは「道教の起源」¹⁷である。言語学やフィールド調査とは無縁だったにちがいない。その時に出会ったのが京大にロシア語を教えに来ていたネフスキーである。そのネフスキーからフィールドワークによる民俗学の楽しさを学ぶとともに、少数民族言語への関心を膨らませていった。

その辺の経緯を高橋(1942)『権太ギリヤク語』の「序説」のなかで、こう回想している。

昭和のはじめ自分がまだ京都帝大の大学院学生だったころ、帝政ロシアの留学生として日本に来られたままずっとこの国にをられたネフスキー先生にロシア語の手ほどきをしていただき、また民俗学の研究法について教室以外でいろいろ懇切なご指導を受けた。ギリヤク語についても、先づ御秘蔵のシュテルンベルグの文法を貸与され、自分はそれを全訳したうへで或る日曜日の午前八時から夜十二時まで先生の前でこの役を読み上げ、先生はテキストを見ながら一々批評訂正を加へて下さった。全く綿のごとくつかれて引きあげ、次の日曜日に今一度この苦心を繰りかへしてやうやくその校正をへた。随分思ひ切った御迷惑をかけたものだ。今ではなつかしい思ひ出の一つとなつてゐる。その訳を出版

¹⁵ 執筆者名はないが「第二回大阪例会」として、上の浅井(1927)のすぐ下に記事が載っている。たぶん、浅井が書いたものだと思う。

¹⁶ なお、土田には、上で引用した土田(1984)以外にも、土田(1970a・b)で浅井追悼文と業績について述べている。

¹⁷ 『京都帝国大学一覽』(自大正十三年至大正十四年)による。

したい考へもあつたが、先生のおすすめで自分自身で別に文法を作ることにした。(高橋 1942:1)

ロシア語で書かれた見知らぬ言語の文法書を翻訳する。それだけでも大変な一大仕事だったにちがいない。しかも、その校正をロシア人のネフスキーと一緒にこない、「午前八時から夜十二時まで」二回の日曜日を使って、翻訳を成し遂げたのだ。高橋の「序説」を読んだだけで、いかに翻訳に苦勞したのかをうかがい知ることができる。こうした苦勞をして、シュテルンベルグが書いたギリヤク語文法の翻訳を完成させた。文献で十分だと考えるのであれば、この翻訳だけでよかつたはずだ。しかし、ネフスキーの勧めにしたがって、高橋は当時、日本の支配下にあった樺太(サハリン)へのフィールド調査に向かった。高橋盛孝、29歳の夏のことである。

その時のフィールド調査報告が雑誌『民族』に掲載されている。それをここに引用しておこう。

昭和三年の夏我々静安学社同人は互に手分けをして或は台湾或は琉球或は樺太、北海道等へ旅行して、言語、土俗等について研究した。その成績の全部は近く刀江書院、岡書院等から発表される予定になつてゐる。

私の受持つたのは、樺太のギリヤクである。かねて、Schternberg 等を通じて極く大体の予備調査を得て、之に臨んだのであつたが、何分世界屈指の困難な発音を有する語の事とて、その成績は、極めて貧弱なものであつた。書き取つた原文は追々発表するつもりであるが極く大体の研究報告だけ此処に発表させて戴く事にする。(高橋 1929:143)

冒頭に「昭和三(1928)年の夏我々静安学社同人は互に手分けをして」とある。つまり、静安学社の第1回集会在が1927年9月で、その翌年の夏休みでのことである。浅井とネフスキーと高橋の三人が静安学社の名のもとにフィールド調査に出かけた。このことは静安学社の初期の目的がここにあったことを意味する。このことは誰も指摘していないが、ここまで小論を読めばあきらかだろう。

なお、そのときの調査報告書は刀江書院からも岡書院からも残念ながら出ていない。次にのべるように、高橋が担当した「ギリヤク(ニヴフ)語」は、1942年、大東亜語学叢刊の1冊として朝日新聞社からようやく出版されることになる。

ところで、静安学社の初期メンバーの中で、リーダー的存在が石濱純太郎であつた。年齢的にいっても、業績的にいっても、彼が静安学社を牽引していたことは疑いのない事実だ。その石濱はフィールド調査についてどう考えていたのであろうか。

それを的確に示した文章がある。高橋盛孝『ギリヤク語』の「序」として書かれた文章を以下に引用しておこう。

高橋盛孝君は東京帝大文学部で支那哲学を修められたのであるが、夙に新興の民俗学的研究に深き興味を感じて支那民俗学研究に従事し幾多の論文は識者の間には認められてゐる。その自己の民俗学研究のために西藏語蒙古語などをも習得し、出でゝは近文アイヌ及び樺太ギリヤクを訪ひ又蒙疆にまで及んでゐる。関西大学にて多年支那学を講じてゐるから世には単なる一漢文教師を以て遇するものもあるが、それは先生の一面に過ぎない。先生を遇するにはその道を以てするならば先生の全貌は我国学界に於ける一異才として現はれ出づるであらう。(石濱 1942:IX)

ここまで、高橋盛孝が単なる漢学の人でないことを強調したあと、本題のギリヤク（＝ニヴフ）との関係をのべる。

高橋君のギリヤクに於ける関心は古い。ネフスキ君と共にシュテルンベルグを講読したのも今は昔のことである。たしかその頃であつたと覚えてゐるが、当時某書店から極北語学叢書が出版されるやうな話があつたので、余は君の訳稿がそれが出るものと期待してゐた。所がその計画が一冊も実行されなかつたが、それは恐らく当時の我学界では荷が重過ぎたのであつたらう。当時としてはヒョットすると実行に移されても、高橋君のものだけしか出なかつたらうと考へても不当でなからう。其後高橋君は樺太まで渡つてギリヤク語資料を蒐集して来た。余はネフスキ君と共に之を我らの静安学社から研究報告として出版したいと話合つたのであるが、微力の学会の力では何とも致し方もなかつた。それが今こゝに遅まき乍ら朝日新聞社から世に出ることゝなつたのは誠に余一人の喜びではない。我国学界の喜びであると信ずる。（石濱 1942:IX-X）

「ギリヤク語資料」がこれまで出版できなかつた。しかし、ようやくそれが実現したと石濱の喜ぶ様子が手に取るようにわかる。うで引用したように、高橋(1929)は「その成績の全部は近く刀江書院、岡書院等から発表される予定になつてゐる」と指摘している。それが石濱がいう極北語学叢書で、そのときには、シュテルンベルグの文法書の翻訳が出る予定だったことがわかる。しかし、これらの出版計画はすべて実現しなかつた。

石濱の「序」はまだまだ続く。ここからは今でいう危機言語への言及がある。

本書は少数未開民族の言語研究書であるが、たゞ物好き学者の著書であると断じてはならない。本書は真摯なる著者が現地に於ける蒐集、それも幾つもある記述の書を蒐めると云ふだけの蒐集でなく、原住民の口から直ちに之を筆録蒐集すると云ふ本当に科学的なる蒐集、それを根底とした科学的研究著作である。かう云ふものは我国言語学界多士濟々たりとは云へ從來誠に稀見の事である。著者の謙虚なる之を誇称はおろか大したものではないと遠慮して居られるが、余等朋友連は之を我国未曾有と称して差支ないとまで思つてゐる。又かゝる未開民族の研究に於て言語と民俗学の連係してなされたるものも我国ではさうたんとない。最新の研究方法を利用して得られたこの成果はまさに後生の模範とすべきものなることをも世に告げて置きたい。（石濱 1942:X）

近年は「未開」や「原住民」という言葉は使われなくなつたが、いまでも「少数民族」はよく使われている。その少数民族言語を「原住民（＝先住民：長田注）の口から直ちに之を筆録蒐集すると云ふ本当に科学的なる蒐集」と石濱は指摘し、「我国言語学界多士濟々たりとは云へ從來誠に稀見の事」であり、「之を我国未曾有と称して差支なく」「最新の研究方法を利用して得られたこの成果はまさに後生の模範とすべきものなること」と絶賛している。この石濱の文章から、静安学社の先駆性に石濱自身が気づいていたことはまちがいない。

さらに、石濱の「序」は以下のように指摘する。

又高橋君の研究に於ては師承もなく後援もなく独歩孤詣のものである。今日こそ極北語族に関心を持つる人もあるが、高橋君の当時誰が之を指導し得たらう。たゞシュテルンベルグの著のみがこれが師であつた。然も君はシュテルンベルグが未調査の南樺太を選んで独力これに邁進したのであつた。君の學術を尊敬せざらんと欲すとも得べからず。余は君の迹を見て自ら省みて愧死すべきである。余は世に若し言語学の賞なるものありとすれば、今年は必ず高橋君のこの著に与へらるべきものであるを信じて疑はない。(石濱 1942:XI)

未調査の現地に行ってフィールド調査をおこない、言語の記述や民話を収集することに石濱が憧れを感じていたのかもしれない。そんなことを想像させる一文である。静安学社の同人がフィールドに出かけた 1928 年には石濱はちょうど 40 歳であつた。体力的に自信がなかつたのか。仕事があつて忙しかつたのか。結局、フィールド調査に行くことはなかつた。しかし、フィールド調査をやりたいという思いが伝わってくる。なお、高橋のこの著は実際に岡倉賞を受賞している¹⁸。

以上、石濱による高橋(1942)の「序」を長々と引用した。初期の静安学社の目指したものが何だったのか。その一端をあきらかにできたのではないだろうか。

さいごに、この石濱の「序」に関連して、もう一点指摘しておきたい。この高橋の記述を今の言語学者はどう評価しているのだろうか。

丹菊逸次は北海道大学准教授でアイヌやニヴフの研究者である。その丹菊が高橋のデータを次のように評価している。

本稿で取り上げる高橋盛孝(1942)は同地域の数少ないニヴフ語資料の一つである。高橋盛孝は中国語学が専門であり、ニヴフ語は 1928 年に 1 度調査をしたただけだが、無理に音韻解釈せず音声表記を優先しており、かなり正確な表記となっている。(丹菊 2018 : 113)

これまでみてくればわかるように、丹菊の「高橋盛孝は中国語学が専門であり」という点には問題があろう。しかし、高橋の記述が「無理に音韻解釈せず音声表記を優先しており、かなり正確な表記となっている」という点に注目してほしい。高橋がフィールドで集めたデータは現代言語学者からみても十分に利用価値がある。石濱の「まさに後生の模範とすべきもの」という表現がけっして誇張ではない。フィールド調査から 100 年近くが経とうとしている現在でも評価されていることを付け加えておく。

4. 『静安学社一覧』について

ここまでは初期静安学社の講演とその講演が意味するものをみてきた。

静安学社集会の記録が『静安学社一覧』(以下一覧と略す)にも記載されている。その集会の講演題目に入る前に、一覧について述べておこう。

筆者が確認したところでは、一覧は昭和 6(1931)年から昭和 16(1941)年まで、毎年発行されていた。昭和 7(1932)年の一覧を以下に引用する。

¹⁸ 『英語青年』(Vol.89 No.8, August 1 1943)によると、「昭和十七年度岡倉賞は、関西大学支那文学教授の『樺太ギリヤク語』(大東亜語学叢刊)に対して」贈与されたとある。

一、静安学社規約 *Regulae* (昭和七年六月訂)

一、本学社は静安学社 (*Societas Orientalis Osaka'ensis, in memoriam Wang Kuo-wei*) と号し以て王国維先生を記念す。

二、本学社は東洋学研究の發達に資するを目的とす。

三、本学社は東洋学研究の同好者を社友として之を組織す。社友加盟希望者は社友一名の紹介により幹事の同意を得るものとす。

本学社は斯界の碩学を名誉社友に推薦する事あり。

四、社友は一年一回以上研究成績を本学社により発表する義務あるものとす。

客友¹⁹は幹事の同意を経て研究成績を本学社により発表するを得。

五、本学社は主旨に本づき左の各項を実行す。

イ、集会

集会は会務の議定報告研究の発表討論の爲め毎年正月、二月、四月、五月、六月、九月、十月、十一月の第四又はその前後の日曜日午後を開く。

六月の集会を総会とし幹事を選挙す。

ロ、出版

ハ、文庫

別に規定を定む。

六、本学社は幹事二名を社友中より公選し社務を処理せしむ。其任期は一年とし重任するを得。又、社務分担の爲め社友に委員を囑託する事あり。

七、本学社の経費は社員之を分担し、集会出席毎に醸出するものとす。

有志者の寄付は幹事の同意を得て受理する事あり。

八、本学社事務所を大阪市内に設く。

現在の事務所は大阪市東区豊後町懷徳堂記念会内に在り。

九、本学社の規約は総会出席の社友三分の二以上の同意により改正するを得。

幹 事 石濱純太郎 高橋盛孝
出版委員 石濱純太郎 石田幹之助
文庫委員 吉田銳雄

二、静安学社々友名録 *Sociorum Nomina*

○故社友、○名誉社友 (狩野直喜、新村出、内藤虎次郎、羽田亨、コンラッドの 5 名) ○社友の順に掲載されている。

三、静安学社刊印書目 *Sociorum Operum Tabula*

¹⁹ 筆者の手元にある一覧【昭和十一年】によると、客友が 16 名と欄外に書き込みがあり、名前と住所が書き込まれている。そのリストを数え上げると実際には 18 名で、大久保莊太郎、村田忠兵衛、本多季磨、田中克己、日野田正英の 5 名は翌年から社友として名前が掲載されている。この一覧は澤英三文庫にあったものなので、澤が書き込んだのかもしれない。

昭和 9(1934)年の一覧からは、以下が冒頭に加わった。

一、静安学社縁起 Societatis Origines

昭和二年春夏の際高橋盛孝同好会合して学術を商榷するの議を主唱す。ニコライ・ネフスキ石濱純太郎之に賛同し、相会して学会創立の案を立つ。適々我等の仰望せる王静安先生遂に大節を完うするに値ふ。乃ち先生を記念して学社の名を定め、以て景仰の意を明にす。秋九月二十五日を以て第一会を發して静安学社成る。此を創設の縁起と為す。

昭和 12(1937)年の一覧から「四、講演題目 Societatis Acta」が加わり、そこに、集会の日時と講演者及び講演題目が掲載されている。また、昭和 14(1939)年の一覧からは「五、静安学社十三年度（自昭和十三年九月至昭和十四年六月）会計報告 S. Ratio」が追加された。

手元にある一覧の最後は【昭和十六年】(1941 年)と表紙に記載されたものである。そこに記載された「六、静安学社刊印書目」をあげておこう。

一、静安学社通報 第一期

二、静安学社報告

第一、浅井 恵倫 ブヌン族ツオ族調査報告

第二、小林太郎 ルーブル美術館蔵支那陶器に就て

第三、浅井 恵倫 パラウ語の音韻法則について

第四、高橋 盛孝 金田一氏の「ユカラ研究」中の「語法摘要」を読みて

三、静安学社一覧（昭和六年、七年、八年、九年、十年、十一年、十二年、十三年、十四年、十五年、十六年）

四、財津愛象先生

五、東洋学叢編 第一冊（刀江書院刊）

六、静安学社展観目録数種

七、静安学社文庫蔵書目録（昭和十年九月現在）及増補一

八、原栄之助遺書目録（近刊）

九、島本一男遺書目録（近刊）

十、静安学社叢稿 第一、石濱純太郎、アルタントプチ考

以上、一覧についてみた。

なお、「静安学社刊印書目」のうち、筆者がコピーを含めて持っているのは「一、静安学社通報 第一期」、「三、静安学社一覧」（ただし、昭和六年は除く）、「四、財津愛象先生」、「五、東洋学叢編 第一冊」だけで、後は未見である。ただし、「六、静安学社展観目録数種」のうち、亀田次郎編『亀田氏貯春楼所蔵本節用集目録』が関西大学デジタルアーカイブからダウンロードできる。また、「八、原栄之助遺書目録（近刊）」や「九、島本一男遺書目録（近刊）」が刊行されたのかどうかは確認できていない。

5. 『静安学社一覧』に掲載された集会と講演

ここからは一覧に掲載された講演を引用しておく。

年号は西暦とし、年月日の漢数字はアラビア数字で示す。また、それぞれの年度の講演題目のあとに、講演者の情報について、筆者がわかる範囲で説明を加えておく。ただし、初期メンバーはすでに長田(2022b)で指摘したので、ここでは述べない。

では、昭和十一年度(1936年9月～1937年7月)の講演者と講演題目をみていこう。

- 1936年9月27日 Bohner Rezeption und Volkspersönalität
大島仲太郎 日本悉曇学の根本誤謬
石濱純太郎 渡部薫太郎先生
- 1936年10月25日 西田長左衛門 孔老二教の先驅としての天道と人道との思想
石濱純太郎 カルマック語に就いて
- 1936年11月24日 亀田 次郎 樺太北海道旅行談
石濱純太郎 六書説
笹谷 良造 古代信仰と仏教思想
- 1937年1月24日 大島仲太郎 因字考
多田 貞一 所字考
石濱純太郎 トマス氏の西藏文新疆文籍訳注の紹介
高橋 盛孝 ヘンツェの月神考を読む
- 1937年2月21日 金戸 守 太極図説考
石濱純太郎 富永仲基の歿年に就いて
茶谷 忠治 詩経
濱 一衛 雑劇に就いて
- 1937年4月25日 石濱純太郎 富永仲基伝 (瓶原、内藤湖南先生旧宅にて)
- 1937年5月30日 大島仲太郎 除非考
野間 光辰 好色一代男考
石濱純太郎 ペイレイ氏の近業
高橋 盛孝 奇怪なる洪水伝説
- 1937年6月27日 西田長左衛門 魂魄説の展開
石濱純太郎 王静安先生の史学
(以上、昭和十一年度)

Bohner とあるのは Herman Bohner ヘルマン・ボーネル(1884-1963)²⁰のことであろう。ボーネルは神道研究者として知られる、いわゆるジャパノロジストである。北畠親房『神皇正統記』をドイ

²⁰ Hermann Bohner は本人がボーネルと呼んでいたもので、本来の発音に近いボーナーとしていない。なお、経歴などは井上純一「牧師館の子 Hermann Bohner—日本への道—」を参照したが、これは以下のサイトで読める。http://koki.o.oo7.jp/08.10.20_inoue.htm また、森下修一郎(1972)「ボーネル先生のの思い出」大阪外国語大学同窓会編『きんきら 50年』125-126 頁にはボーネルの写真が掲げられている。

ツ語に訳し(Bohner 1935)、花園天皇(Bohner 1938)や和気清麻呂(Bohner 1940)についての論文を執筆している。1922年開学とともに、大阪外国語学校に赴任し、ドイツ語を教えていた人である。一覧には名前はないので、静安学社の社友ではない。講演のタイトルにある Volkspersonalität は日本人の民衆気質のようなものを神道とか国体とかを使わないで表したものとされる²¹。

大島仲太郎(1894-1945)は1913年から16年間、堺市助役を務めた人で²²、もともとは万葉集を研究していた国学者である。助役を辞めた後、日蓮宗の信仰から法華経の研究をするようになり、『法華経索引』を作成した。また、法華経の原典にあたるために、梵語を学んでいる²³。一覧【昭和十一年】から社友として名簿に掲載されている。

西田長左衛門(1874-1941)は漢学者である²⁴。その当時浪速高校教授で、老子や莊子を詳解全訳漢文叢書として刊行している。静安学社の第14回集会(1929年4月21日)で講演していることから、創設3年目には静安学社の社友となっていたと思われる。一覧【昭和十六年】(1941年)によると、「昭和十六年二月一日没、享年六十八」とある。講演題目がわかっているものだけで、15回の講演をおこなっている。石濱につく講演回数をほこる。

亀田次郎(1876-1944)は韻鏡などの古文書を収集した国語学者で、その蔵書は国会図書館に亀田文庫として収められている。石濱とは亀田が大阪外国語学校に勤務していた時からの知己であり、静安学社の第5回集会(1928年2月19日)で講演している。したがって、静安学社には初期に参加したと思われる。一覧に掲載された講演回数は7回で、頻繁に講演をしていたことがうかがえる。

笹谷良造(1901-1969)は年譜に創設メンバーの一人と書かれているが、実際には後の参加者である。国学院大学出身の民俗学者であり、折口信夫の弟子である。一覧の名簿には奈良県立郡山中学教諭とある。北村信昭(1983:67)によると、「静安学社にはネフスキーの紹介で入会されている」とある。ネフスキーが帰国する1929年9月以前に静安学社の社友となったのであろう。

多田貞一(1905-1945)²⁵は一覧【昭和八年】(1933年)には「兵庫県立神戸第三中学校教諭」と肩書が記されている。一覧【昭和十一年】(1936年)には鉛筆書きで大連の住所があり、翌年の一覧では「大連中学教諭」と所属になっている。さらに一覧【昭和十四年】(1939年)では「北京興亜院連

²¹ Wachutka(2012)、Scheid(2013)を参照した。ただし、Wachutka(2012)では Volkspersonalität を英語で the Nation's personality と呼び、日本語訳で「国民的人格」としている。Bohner(1940:240)では eine Geschichte des Japanischen Wesen を der japanischen Volkspersonalität と言い換えているので、この訳語はいかながなものか。「日本人気質」といったものなのだろう。

²² 『堺市史』第二巻266頁による。また、『堺市史』編纂沿革(第八巻)によると、『堺市史』の編纂部長を大島が務め、大島が執筆者などを決めたという。なお、『堺市史』(全八巻のうち七巻を除く)は国会図書館デジタルコレクションで読める。

²³ 今年刊行予定の石濱純太郎『太壺讀書記』(高田時雄編集)に「大島仲太郎翁」という一節があるが、そこに大島が堺市助役だったこと、日蓮宗の熱心な信者だったこと、石濱から梵語を学ぼうとしたが固辞したことなどが記されている。刊行前の原稿をご教示くださった高田時雄京都大学名誉教授に謝意を表したい。

²⁴ 岡崎(1986)によると、西田はかつて小説を書いていた。それらについては今後の課題とする。

²⁵ 多田の死亡年について、吾妻(2017:207)によると、「厚生労働省のホームページの「ソ連邦抑留志望者名簿50音別索引」を見ると、確かに「タダテイイチ」(通番786)の名があり、死亡年月日は「一九四五年十月五日」、「埋葬地未記載」とする。ただし、この「タダテイイチ」がここ述べる多田貞一であるかどうかは、なお確認を要す」とある。しかし、多田とともに東方民俗研究会設立の際に参加した澤田瑞穂(1988:286)によると「故多田貞一氏(当時北京藝術専科学院講師、終戦直前に召集を受けて戦病死)」と述べている。1945年に亡くなったことはまちがいない。

絡部政務局」所属となり、一覧【昭和十六年】では「北京外国語専科学校教授」との肩書である。

金戸守(1901-1980)²⁶は一覧に記載された所属は「大阪府立今宮中学校教諭」である。一覧【昭和十二年】(1937年)から手元にある最後の一覧【昭和十六年】(1941年)まで、静安学社の幹事になっている。『儒教哲学原論』を1944年に出版するなど、漢学者として活躍した。茶谷忠治は一覧に記載された肩書は関西大学講師である。1922年に『基本的知識の養成と総復習を目的とした国語の練習：中学校女学校実業学校入学準備』という本を出版している。また、『関西大学学報』111号(1933年)に「詩経新訳」を掲載しているのが、漢学者であろう。

濱一衛(1909-1984)²⁷は大阪生まれ、高津中学から旧制浪速高校を経て、1933年に京大支那語支那文学専攻を卒業後、1934年から36年まで北京に留学した。静安学社の講演のすぐあと、1937年3月からは灘中学校教諭、1938年3月からは松山高等商業学校教授、1949年からは九州大学助教授となり、定年まで九大に務めた。静安学社の社友にはなっていないが、一覧【昭和十年】(1935年)に鉛筆書きされた客友として名前がある。

野間光辰(1909-1987)は西鶴研究者として有名な国文学者である。旧制浪速高校から京大に進み、1949年京大助教授、1951年教授となり、1973年に退官している。一覧【昭和十一年】(1936)から社友として名前が載っていて、当時は浪速高校教授である。静安学社の講演時はまだ20代だったが、この時すでに西鶴を扱っている。

以上、昭和十一年度の講演者について述べた。

続いて、昭和十二年度(1937年9月～1938年7月)の講演題目一覧を引用しよう。

- | | | |
|-------------|--------|----------------------|
| 1937年9月22日 | 石濱純太郎 | 摩尼教識悔文の断簡 |
| | 丸山正三郎 | 支那事変に於ける上海文化界協会の活動 |
| | 大島仲太郎 | 日本紀正統疑義 |
| 1937年10月24日 | 西田長左衛門 | 斯文 |
| | 大久保荘太郎 | 西漢災異論 |
| | 石濱 純太郎 | Wellerの蒙文梵網經考 |
| 1937年11月28日 | 石田 幹之助 | 筠軒長寿公之碑について(石濱純太郎代読) |
| | 西田長左衛門 | 方法論の問題と余の思想史の輪郭 |
| | 村田 忠兵衛 | 入竺僧の言及せるパーニニに就て |
| 1938年1月30日 | 田中 克己 | 五雜俎考 |
| | 西田長左衛門 | 麴に就て |
| | 高橋 盛孝 | アイヌの家族制度 |
| 1938年2月27日 | 原 栄之助 | 論中国文法学 |
| | 西田長左衛門 | 磔に就て |
| | 石濱 純太郎 | 満洲辞典考 |
| 1938年4月24日 | 石濱 純太郎 | 魏石經 |

²⁶ 吾妻(2017:196)に金戸守の紹介がある。

²⁷ 濱一衛については中里見敬・中尾友香梨(2009)を参照した。以下からダウンロードできる。
https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/14739/hama_bunko_zuroku.pdf

- 大久保荘太郎 グラネ著支那古代の祭礼と歌謡
 大島 仲太郎 日本紀の双頭蓮に就て
 1938年5月29日 宮武 正道 メナンカバウ語とマレー語の音韻変化
 亀田 次郎 荻生徂徠及釈文雄の戯著
 榊 源次郎 印度音楽
 1938年6月26日 石濱 純太郎 スタインの近著
 高橋 盛孝 韃靼と踏板戯
 西田長左衛門 鬼の思想の三大変化と思想史的意義
 (以上、昭和十二年度)

まず、丸山正三郎(1912-1985)²⁸は今宮中学から旧制大阪高校を経て、東大支那哲学科を卒業。一覽【昭和十年】(1935)に、はじめて社友として登場する。所属は甲南高等学校である。講演内容を見るかぎり、その当時の中国政治情勢に関連したものが多し。大久保荘太郎(1913-)は一覽【昭和十一年】(1936)に、鉛筆書きで客友として名簿に掲載され、翌年から社友となる。所属は大阪府立岸和田中学教諭である。しかし、一覽【昭和十四年】(1939)からは京都帝国大学人文科学研究所の所属である。1944年から建国大学に赴任し、召集後、シベリア抑留を経験し、戦後は羽衣学園短大に務めた。村田忠兵衛(-1982)²⁹は一覽【昭和十二年】(1937)ではじめて社友となり、所属は記載がない。『大阪外国語大学70年史』によると、大阪外大に1948年4月に赴任し、1978年3月に定年退官している。大阪外大の定年は65歳だったので、1912年ごろの生まれだったと思われる。

田中克己(1911-1992)は詩人として名高い。旧制大阪高校から東大東洋史学科を出ている。一覽【昭和十一年】(1936)に客友と手書きで記され、翌年から社友となっている。最初の肩書は「大阪浪速区中学校教諭」となっているが、翌年から住所を東京に移し、一覽【昭和十五年】からは「蒙古研究所」、翌年は「北アジア研究所」となっている。田中克己の日記がインターネット上にアップされていて³⁰、そこに静安学社関連の話が掲載されている。

原栄之助(-1939)は一覽【昭和十年】(1935)から一覽【昭和十四年】(1939)まで社友として掲載されているが、一覽【昭和十五年】(1940)には故社友として、「昭和十四年三月八日没、享年二十九」と記されている。昭和12(1937)年に京大文学部史学科選科³¹に入学し、将来を有望視されていた。石濱の「故渡部薫太郎先生」と題する追悼文に、「先生の薫陶を受けたる新進の俊秀中には楠松外語教授、笠井信夫君、原栄之助君、秋山某君などを数へ得るが」(高田編2018:98)と名前があがっている。

宮武正道(1912-1944)は一覽【昭和八年】(1933)からの社友である。21歳から静安学社に参加し、マレー語などを研究し、石濱が川崎直一と編集に関わった『大東亜言語叢刊』シリーズの最初に刊行された『マレー語』の執筆者である。石濱シュレーの若きエースだったが、病気で早世してしまった。「にぶき良心で」(高田編2018:121-123)は石濱による宮武追悼文である。

榊源次郎(1904-1995)³²は一覽の会友欄に掲載されたことがないので、静安学社の客友として発表

²⁸ 丸山(1987)には丸山の没年が掲載されている。

²⁹ 死亡年については溝上富夫大阪外大名誉教授のご教示による。

³⁰ <https://shiki-cogito.net/tanaka/tanaka.htm>

³¹ 『京都帝国大学一覽』による。

³² 榊源次郎については劉麟玉(2013)「民族音楽学者榊源次郎再考—日本とインドの間の足跡を辿る」

したのであろう。大阪生まれで、東洋音楽学校を1926年卒業後、1935年から二年間、インドに留学してインド音楽を学んだ。1937年9月に「印度音楽に就て」が『日印協会会報』第62号に掲載されているので、それを読んだ誰かが静安学社での講演を提案したのかもしれない。

以上、昭和十三年度の講演者たちについてのべた。

続いて、昭和十四年度(1938年9月～1939年7月)の講演題目をみていこう。

- | | | |
|-------------|-----------------------|----------------------------------|
| 1938年9月25日 | 大久保莊太郎 | 易の成立に就ての一見解 |
| | 金戸 守 | 儒教の立場 |
| | 丸山正三郎 | 新文化運動の性格 |
| | 森 安太郎 | 恆字考 |
| | 茶谷 忠治 | 詩序に就て |
| | 吉田 鋭雄 | 懷徳堂に於ける二大天才 |
| | 高橋 盛孝 | 禹と九州 |
| | 西田長左衛門 | 劉部人物志の思想史的背景 |
| | 石濱 純太郎 | 西夏語訳の外典 |
| 1938年10月16日 | (斯文会主催漢学大会を以て例会に代へたり) | |
| 1938年11月27日 | 高橋 盛孝 | 耳環の話 |
| | 石濱純太郎 | ブリアト語文典 |
| | 坂井 喚三 | 浅見綱斎に就て |
| 1939年1月29日 | 吉永 登 | 萬葉集中の一二の訓義に就て |
| | 西田長左衛門 | 學字考 |
| | 石濱 純太郎 | ヘニング氏の吐貨邏焉耆考 |
| 1939年2月26日 | 笹谷 良造 | 連用形の研究(石濱純太郎代読) |
| | 堂谷 憲勇 | 歴代名画記に就て |
| | 森 三樹三郎 | グラネの「支那古代の祭礼と歌謡の研究」に就ての一考察 |
| | 石濱 純太郎 | マルコポロのゼラダ本 |
| 1939年4月23日 | 丸山 正三郎 | 大民会に就て |
| | 村田 忠兵衛 | 故原栄之助君と其の蔵書 |
| | 笹谷 良造 | 精神文化 ³³ 研究所々見 付 死靈之行方 |
| | 石濱 純太郎 | 蒙古語字書ムカヂマドアルアダブ考 |
| 1939年5月28日 | 長部 和雄 | 宋の弓箭社に就て |
| | 斉藤 護一 | 荻生徂徠の漢文直読法 |
| | 亀田 次郎 | 韻鏡の二三の問題に就て |
| 1939年6月25日 | 高橋 盛孝 | 蒙古チャルハル盟の伝承文学 |
| | 西田長左衛門 | 月令考(時令考) |
| | 石濱 純太郎 | アルタントプチの翻訳 |

『奈良教育大学紀要：人文・社会科学』62(1):97-104を参照した。

³³ 原文では「精神文科」と誤記されている。

(以上、昭和十三年度)

まず、1938年9月25日と10月16日の会についてみておこう。

10月16日の会には「斯文会主催漢学大会を以て例会に代へたり」と但し書きがある。その漢学大会の報告が石濱純太郎編(1938)である。それをみると、確かに10月16日の日付けはまちがいない。しかし、9月25日の講演と漢学大会の発表とが混同されている。石濱編(1938)には以下の研究発表が掲載されている。

研究報告集録

- 一、 荀子に於ける禮成立の過程・山口高等學校教授 石黒俊逸 / 6
- 二、 伏生大傳經説考・東方文化學院 内野熊一郎 / 8
- 三、 易の成立につきての一見解・大阪府立岸和田中學校教諭 大久保莊太郎 / 15
- 四、 儒教の立場・大阪府立今宮中學校教諭 金戸守 / 19
- 五、 江戸時代の荀子學に就いて・東方文化學院 北田數一 / 20
- 六、 去聲に就て・京都帝國大學助教授 倉石武四郎 / 25
- 七、 洪範五行傳考・東京高等師範學校助教授 小林信明 / 29
- 八、 漢初の儒家思想に於ける孝弟道德の地位・第三高等學校教授 重澤俊郎 / 32
- 九、 周易と尚書の月の四分法に就いて・日本文化中央聯盟・高橋峻 / 37
- 一〇、 禹と九州・關西大學教授 高橋盛孝 / 40
- 一一、 目錄の學・東北帝國大學教授 文學博士 武内義雄 / 42
- 一二、 拘幽操に就いて・大阪商科大学教授 經濟學博士 田崎仁義 / 44
- 一三、 元・白の詩に表れたる官吏の衣服に就いて・斯文會 豊田穰 / 50
- 一四、 劉邵の人物志と支那藝術論の特質・浪速高等學校教授 西田長左衛門 / 54
- 一五、 邢昺の孝經注疏校定に就いて・第六高等學校教授林秀一 / 56
- 一六、 現代支那の楚辭研究の一斑・松本高等學校教授 星川清孝 / 61
- 一七、 公羊家の所説に就いて・龍谷大學教授 文學博士 本田成之 / 68
- 一八、 松平定信の儒學的教養・東京帝國大學大學院 松平定光 / 72
- 一九、 明の劇作家梅鼎祚に就いて・岡山第一中學校教諭 八木澤元 / 74
- 二〇、 支那語に於ける否定・東方文化研究所 吉川幸次郎 / 82
- 二一、 懷徳堂に於ける二大天才・懷徳堂助教授 吉田鋭雄 / 86

これら発表のうち、大久保莊太郎、金戸守、吉田鋭雄、高橋盛孝、西田長左衛門の発表題目が静安学社の9月25日の講演題目と完全に一致している。また、石濱編(1938:3)によると、「又研究発表の原稿は時間の都合により会場に於て発表の出来なかつた諸先生の分をも集録した。たゞ牧野巽氏の「明清家訓」、森三樹三郎氏の「社非樹神説」、茶谷忠治氏の「詩序について」、森安太郎氏の「恒字考」、丸山正三郎氏の「支那近代文学運動の意義」は諸氏の都合により遺憾ながら収め得なかつた」とある。すなわち、9月25日の講演題目となっているうち、「石濱純太郎 西夏語訳の外典」以外はすべて10月16日の大阪漢学大会での発表だったことがわかる。このことから、9月25日の発表は「石濱純太

郎 西夏語訳の外典」だけということになる³⁴。

日付の混同以外に、この大阪漢学大会の発表のうち、一覧で講演題目にあがったものだけを静安学社の講演とみなしたのはなぜなのか。静安学社の社友かどうかを基準とするならば、社友である武内義雄は除かれて、社友でない森安太郎が入っているのが腑に落ちない。いずれにせよ、講演題目の記録に関しては一覧を絶対視してはいけないということなのかもしれない。なお、森安太郎は戦後京都女子大で教鞭をとっておられた方で、手元の資料をみるかぎりでは静安学社の社友にはなっていない。

昭和十三年度の講演者に戻ろう。坂井喚三(1890-1951)はいまみた石濱編(1938:1)に「坂井喚三督学官」とある。督学官とは耳慣れない名称である。デジタル大辞泉によると、「大正2年(1913)視学官を改称して置かれた教育行政官。専門学務局または普通学務局に所属してその事務をとるとともに、学事の視察・監督を行った。昭和17年(1942)教学官と改称」とあり、文部省の役職である。この督学官のあとは奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)校長や第八高等学校(現・名古屋大学)校長を歴任している。ここからは全くの推測に過ぎないが、静安学社の社友ではない坂井は、漢学大会の大阪大会成功の御礼として静安学社での講演を受託したのではないか。同じ時期に、坂井喚三(1938)「論説 浅見綱齋の格物論」『斯文』18(10) 1-9を發表しているので、浅見綱齋について講演をおこなったのであろう。

吉永登(1906-1989)は奈良県出身で、1927年関大文学部卒の国文学者である。一覧【昭和七年】(1932)からの静安学社の社友である。最初は「大阪府立豊中中学嘱託」、翌年からは「大阪府立豊中中学教諭」、一覧【昭和十年】から一覧【昭和十六年】までは「兵庫県立伊丹中学校教諭」、1943年に関西大学教授となり定年まで関大に務めている。万葉集を専門とし、静安学社の講演も万葉集に関するものが多い。

堂谷憲勇(1900-1976)³⁵は大谷大学を出た後、東北大学の美術学科を卒業した中国美術史家である。一覧【昭和十一年】(1936)から社友として掲載されている。肩書は「大阪市美術館鑑査嘱託」で、一覧【昭和十六年】では「大阪市美術館」のみが記されている。初期メンバーである小林太一郎が大阪美術館に務めていたので、同僚である小林に誘われて静安学社に参加したものと推測できる。講演題目の「歴代名画記に就て」については堂谷(1939)として『美術研究』に掲載されている。

森三樹三郎(1909-1986)は舞鶴生まれ、大阪高津中学出身で、1935年に京大支那哲学科を卒業し、長く大阪大学に勤務していた。手元にある一覧をみるかぎり、静安学社の社友にはなっていない。1944年に『支那古代神話』を出版しているので、1938年に翻訳本が出版されたグラネ『支那古代の祭礼と歌謡の研究』³⁶に関心を寄せての講演だったのであろう。

長部和雄(1907-)³⁷は甲南高校から京大東洋史学科を卒業し、神戸商科大学で長く教鞭をとられていた。一覧【昭和八年】(1933)から社友に名前があり、「大倉商業学校教諭」となっている。一覧【昭

³⁴ ただし、石濱純太郎「西夏語の外典」は龍谷大学支那学会編(1942)『京都漢学大会紀要』興教書院。68-71頁に掲載されているので、漢学大会での発表だった可能性もある。

³⁵ 堂谷憲勇の生没年については堂谷憲勇先生遺芳編集委員会編(1978)を参照した。その『堂谷憲勇先生遺芳』には「吾慮を愛す—小林太一郎君を憶う」と小林太一郎の追悼文があり、二人の交流が深かったことがわかる。また、南条文雄『懐旧録』の『懐旧録』の後に書すによると、大谷大学在学中だった堂谷がその清書をおこなったという。

³⁶ グラネ(内田智雄訳)『支那古代の祭礼と歌謡の研究』は現在東洋文庫(平凡社)として読みことができる。

³⁷ 長部和雄については豊原治郎(1973)「長部和雄教授の学風」を参照した。

和十年】からは「大阪府立女子専門学校(後の大阪女子大)講師」となっている。講演題目の「宋の弓箭社に就て」は『史林』24(3):591-603(1939)に掲載されている。

斉藤護一は東大支那哲学支那文学科を1933年に卒業している³⁸。一覧【昭和十一年】からの社友であり、所属は「大阪高等学校教授」とある。国会図書館サーチで検索すると、戦後の論文は見当たらない。終戦までに亡くなったのかもしれない。今後の調査が必要だ。

つぎに昭和十四年度(1939年9月～1940年7月)の講演題目をみよう。

1939年10月1日	加恵 静雄	中支視察談
	高橋 盛孝	蒙疆視察談
	石濱純太郎	故原栄之助氏の遺書
1939年10月29日	雫石 鉦吉	詞の起源に就て
	西田長左衛門	鬼字続考
	石濱 純太郎	文之和尚享年
1939年11月19日	高橋 盛孝	蒙古の音楽
	亀田 次郎	最近国語系統論の動向
	神田 喜一郎	正史彙刻本の源流
1940年1月28日	大島 仲太郎	和漢混淆文 ³⁹ の特点に就て
	山本 磯治	神皇正統記の日本開闢説と儒学思想
1940年2月25日	吉永 登	万葉集に就ての一、二の考察
	西田長左衛門	莊子に見れたる気概念
	石濱 純太郎	和訳蒙古源流
1940年4月28日	笹谷 良造	古代に於ける水の信仰
	高橋 盛孝	鳧鐘考
	石濱 純太郎	歴代帝王紀年纂要考
1940年5月28日	斉藤 護一	全像本水滸伝に就て
	西田長左衛門	論語に見れたる道に就て
	石濱 純太郎	蒙古源流の七史に就て
1940年6月30日	吉永 登	萬葉集のがてりに就て
	長部 和雄	白衣会に就て
	石濱 純太郎	説蔽积義

(以上、昭和十四年度)

加恵静雄⁴⁰は一覧【昭和十四年】(1939)ではじめて社友となり、その所属は「大阪府立四条畷中学教諭」である。一覧【昭和十六年】では「山口県女子師範学校教諭」となっている。雫石鉦吉(1910

³⁸ 『東京帝国大学卒業生氏名録』(1939年)を参照した。

³⁹ 原文では「和漢、混、淆文」となっている。

⁴⁰ 渡辺正勇(1973)「加恵静雄君を惜しむ」では加恵と東京高師で一緒だったことや「亡くなってから早二年になる」とあるが、具体的な経歴などは一切ない。

一)⁴¹は旧制八高、東大を出て、宮城県石巻中学教諭を振り出しに、浪速高校、大手前女学校、北野高校で国語・漢文の教諭として多くの生徒を教え、後池田高校校長を務め、後関西外国語短期大学教授を務めた。一覧【昭和十四年】(1939)から社友として記載されている。

山本磯治(1896-1944)⁴²は一覧【昭和七年】の社友に名前が掲載され、「大阪外国語学校教授」とある。静安学社の講演は山本磯治(1934)「論説 神皇正統記正統論と儒教」『斯文』16(2):1-21に基づくものと思われる。『大阪外国語大学 70 年史』での扱いは少なく、1944 年に亡くなったことも記されていない。

なお、長部和雄の講演「白衣会に就て」は後に長部(1943)としてまとめられている。その冒頭に以下の記述があるので、引用しておく。

此の小論の着想は去る昭和 15 年 4 月大阪静安学社の例会席上に於て発表しました旧稿に係りますが、当時意に満たず筐底に蔵して今日迄其の儘になつて居ました。然るに今度不肖高野山大学に奉職致すことになり、恰も環境が宗教研究の中枢に移りましたのを機会に再び之を引き出し手入補筆を致し同学諸賢の是正教示を乞ふ次第です。(長部 1943:58)

ここでも日付にずれがある。一覧の講演題目に掲載されていたのは 6 月 30 日だが、ここでは 4 月とある。三年後の執筆なので、長部の記憶違いの可能性の方が高い。

以上、昭和十五年度の講演者をみてきた。

さいごに、昭和十五年度(1940 年 9 月～1941 年 7 月)の講演題目をみておこう。

1940 年 9 月 29 日	笹谷 良造	連体形の発生
	西田長左衛門	佩玉考
	石濱 純太郎	蒙文蒙古史記及び羅馬字転写日本訳対訳 喀喇沁本蒙古源流(藤岡勝二著)に就て
1940 年 10 月 20 日	斎藤 護一	百二十回本水滸伝の成立に就て
	高橋 盛孝	かくれ蓑考
	石濱 純太郎	蒙古世系譜
1940 年 12 月 1 日	西田長左衛門	老子史官説
	石濱 純太郎	チムール関係古書
	亀田 次郎	安藤昌益に就て
1941 年 2 月 2 日	丸山 正三郎	陳高傭の「中国文化問題研究」に就て
	大島 仲太郎	出定後語の法華経の批評に就て
	榊田 武雄	パスパ字に就て
1941 年 2 月 23 日	笹谷 良造	活用形余談

⁴¹ インターネットには雫石鉞吉に関する情報がかなりある。加地伸行阪大名譽教授が高校の漢文の授業で雫石の朗読を初めて聞き、漢文に関心を持ったそうだ。

⁴² 生亡年はインターネットサイトの公文書「故大阪外事専門学校教授山本磯治叙勲の件」より引用した。邵艶(2004)によると、山本磯治の在籍期間が 1931~1936 となっているが、死亡時も大阪外事専門学校(大阪外国語学校が改名)教授である。

	高橋 盛孝	苗族雑談
	石濱 純太郎	蒙古喇嘛教史に就て
1941年4月27日	善峰 憲雄	地丁銀の精神
	吉永 登	萬葉集の季節感
	石濱 純太郎	五体合璧金剛教
1941年5月25日	岡崎 精郎	党頂勃興過程の一考察
	石濱 純太郎	靈松義端上人に就て
	亀田 次郎	新韻集に就て
1941年6月29日	藤野 立然	慧遠とその時代
	植杉 英之助	伊達千廣翁
	亀田 次郎	前田利保卿の学術
		(以上、昭和十五年度)

梶田武雄は一覧【昭和十五年】(1940)から社友となっているが、所属の記載はない。大阪言語学会でも発表しているが、ネットなどで検索しても一切見当たらない。善峰憲雄(1918-)⁴³は北野中学、旧制浪速高校から京大東洋史に進学し、龍谷大学、神戸女子大で教鞭をとられた。次にのべる岡崎精郎とは旧制高校、大学と同期である。手元にある一覧をみるかぎり、静安学社の社友ではない。

岡崎精郎(1920-1993)⁴⁴は旧制浪速高校から京大東洋史に進学し、長く追手門学院大学に勤務していた。石濱シュレー研究の先駆者であり、小論の静安学社講演の前半部分は岡崎(1979)に依拠している。一覧【昭和十六年】までの社友のリストにはないが、戦後は静安学社のメンバーとなっている。石濱文庫の整理に携わり、石濱純太郎宛書簡をもとにして、「石浜・石田両博士学術交流記録抄」を2回にわたって連載している。善峰、岡崎とも講演当時は学生だったが、社友には名前が掲載されていない。学生には講演の機会を与えるが、社友としては認めないという規則だったのかもしれない。

藤野立然は一覧【昭和十六年】までの社友のリストにはない。1937年、『支那仏教史学』の創刊に参画し、龍谷大学に長く務めていた。植杉英之助(1906-1997)は1931年に京大西洋史学科を卒業している⁴⁵。一覧【昭和十五年】に社友として名前があり、翌年の名簿には「兵庫県立伊丹中学校教諭」とある。兵庫県立高校の学校長を務めた後⁴⁶、神戸山手短大に勤務し、1978年には短大紀要に「伊達千廣の「大勢三転考」について」を発表している。これが講演と関連するものと思われる。

以上、一覧を参照しながら、講演者について述べた。

6. 『静安学社一覧』に掲載された講演者と講演内容

まず、講演回数についてみていこう。

すべての講演の日数と回数を以下にあげる。ただし、漢学大会での発表は除いている。

⁴³ 善峰憲雄については、善峰憲雄(1990)の「善峰憲雄先生略年譜」を参照した。

⁴⁴ 岡崎精郎については、近藤治(1993)を参照した。

⁴⁵ 『京都帝国大学一覧』による。

⁴⁶ 筆者の母校である兵庫県立長田高校校長を1964年4月から1966年3月まで務めた。生没年は長田高校関係者から姉が聞いてくれたものである。

昭和十一年度(1936年9月～1937年7月) —8日間 23講演
 昭和十二年度(1937年9月～1938年7月) —8日間 24講演
 昭和十三年度(1938年9月～1939年7月) —7日間 21講演
 昭和十四年度(1939年9月～1940年7月) —8日間 23講演
 昭和十五年度(1940年9月～1941年7月) —8日間 24講演

集会があわせて 39 日間、のべ 115 回の講演がおこなわれたことになる。このうち、2 回以上、講演をおこなった人を講演回数が多い順に並べておこう。

31 回—石濱純太郎、14 回—西田長左衛門、11 回—高橋盛孝、7 回—大島仲太郎、亀田次郎、6 回—笹谷良造、4 回—吉永登、3 回—丸山正三郎、斉藤護一、2 回—大久保莊太郎、村田忠兵衛、長部和雄

39 日間開催された集会で、石濱が群を抜いて講演回数が多く、31 回、つまり 5 年間で発表しなかったのは 8 日間だけである。年 8 回の講演日で 6 回は講演をしたことになる。その講演内容も海外の研究紹介もあれば、マルコポーロがあり、満洲語、西夏語、蒙古語などの文献紹介と種々多彩である。創設メンバーだった、ロシアに帰ったネフスキーや台北帝大に赴任した浅井が静安学社の集会に参加しなくなった。それからは「石濱の、石濱のための、石濱による」静安学社になってしまった。そんな印象を懐かせる。

また、1 回しか講演をしなかった人は 23 名を数える。一覧【昭和十六年】に社友として名前があがっているのは 57 名である。社友に名を連ねていても、一度も発表しない人も多かったことがわかる。

一覧に掲載された講演題目は初期の講演題目と一目瞭然、ことなっている。初期に多かったフィールド報告や言語学関連のものは少なくなって、中国古典や日本古典の文献学的研究が圧倒的である。

ちなみに、フィールド報告や言語学関連の講演を以下にあげてみよう。

1936年10月25日	石濱純太郎	カルマック語に就いて
1936年11月24日	亀田次郎	樺太北海道旅行談
1938年2月27日	石濱純太郎	満洲語辞典考
1938年5月29日	宮武正道	メナンカバウ語とマレー語の音韻変化
1938年9月25日	石濱純太郎	西夏語訳の外典
1938年11月27日	石濱純太郎	ブリアト語文典
1939年2月26日	笹谷良造	連用形の研究
1939年11月19日	亀田次郎	最近国語系統論の動向
1940年9月29日	笹谷良造	連体形の発生

以上である。ただし、「視察」や「雑談」などはフィールド報告とはみなしていない。また、亀田次郎「樺太北海道旅行談」がフィールド調査報告なのかどうかはわからないが、ここに数えておいた。

今みたように、言語学関連の講演は石濱純太郎や亀田次郎、笹谷良造の限られた人のみがおこなっている。115 回の講演中一割にも満たない、たった 9 回だけが言語学、フィールド報告関連である。初期の講演との差異はあきらかだ。筆者は漢学の素養もなければ中国古典、日本古典に関してはまっ

たく疎く、これ以上の分析はできない。しかし、小論によって、一覧掲載の講演内容と初期静安学社との相違だけははっきりとしたのではないだろうか。

7. 『静安学社名簿』(1951年4月現在)に掲載された例会

戦後の静安学社の活動についてはこれまで何もわかっていなかった。

しかし、堤一昭阪大教授によって、『静安学社名簿』(昭和二十六年四月現在)が石濱文庫から見つかった。そこで、その名簿に記載された例会(戦後には講演という名前ではなく例会と呼ばれている)を紹介しておきたい。

二十五(1950)年度例会記録

4月30日	東洋的精神の哲学的理解	藤本 是
	律令国家の本質	横田健一
	鴨君足人の歌について	吉永 登
	厠字について	北村 肇
6月4日	(ウラル・アルタイ学会と合同 於 大阪外大)	
	村と町	高橋 盛孝
	最近の外蒙文献の紹介	精松 源一
7月9日	枕詞を通じて見た記紀の歌謡	吉永 登
	占国の神話と祭儀	横田 健一
	英語学の問題	広岡 英雄
9月24日	(千里山学舎図書館)	
	吉田文庫・生田文庫参観・座談会	
11月26日	好色一代女“老女の隠家の挿絵”について	中野 真作
	伊良虞島考	吉永 登
	前期封建社会転換期に於ける歴史意識	横田 健一

名簿を見ると、戦前のように、外国人の社友やいわゆる外地に滞在している静安学社のメンバーはいない。それだけでなく、東京に滞在する人などもメンバーになっておらず、大阪周辺に住むだけがメンバーとなっている。創設メンバーとしては高橋盛孝だけが残り、かなりのメンバーが一掃されている。また、発表者も関西大学関係者でほとんど占められていて、北村肇だけが「大阪府庁」の所属であるが、元を質せば彼も関大出身者なのかもしれない。ただし、ウラル・アルタイ学会と合同での例会発表者である精松源一は大阪外大所属である。

思い出してほしい。静安学社規約に「二、本学社は東洋学研究的の発達に資するを目的とす」とあったことを。「英語学の問題」はどうみても「東洋学研究的の発達」とはかかわらない。広岡英雄(1918-2012)は関大教授だった人だが、さすがに静安学社のメンバーには入っていない。

静安学社は戦前と戦後ではすっかり様変わりしてしまった。少なくとも、この1950年の例会記録からは、はっきりとみてとれる。それを知ることができたのは堤教授によって発見された「静安学社名簿」があったからだ。この場を借りて、謝意を表したい。

8. 静安学社から大阪言語学会へ

「日本言語学史拾遺」として、これまで二回にわたって、1942年設立の大阪言語学会について述べた。一方、大阪言語学会と同様、石濱純太郎が1926年に設立したのが静安学社である。小論はその静安学社について述べた。

戦前の静安学社集會にかぎっていえば、ここまで紹介したのは1941年6月29日までの集會である。一方、大阪言語学会の第1回例會は1942年2月15日である。あたかも静安学社の集會がおこなわれなくなって、大阪言語学会の例會がはじまったように思われるかもしれない。しかし、大阪言語学会が創設された後も、静安学社の集會はおこなわれていた。

大阪言語学会の以下の例會をみると、静安学社との共同開催となっている。

1942年10月20日

岡崎 精郎 高昌行紀に就て

梶田 武雄 契丹文字

高橋 盛孝 パレオアジア語及びアメリカ語に於ける接詞について

つまり、昭和十七年度(1942年9月～1943年7月)以降も静安学社の集會はおこなわれていたが、その記録がいまのところ見つかっていないということになる。

静安学社の活動が續行するなか、なぜ大阪言語学会を創設することになったのか。

少数民族言語をフィールドワークを通じて記述する。これが初期の静安学社の方針であったことは、小論でみてきたとおりである。実際に、講演についても、フィールド報告の発表が多かった。ところが、静安学社の講演は回を重ねるごとに、あれほど幅を利かせていた言語学関連の発表が著しく少なくなっていく。これが大阪言語学会を創設する、一つの理由だったことはまちがいない。一覽【昭和七年】(1932年)ですでに社友だった、蒙古語の精松源一、京大言語学科の泉井久之助、エスペラント語の川崎直一などは、手元の資料をみるかぎりにおいて、静安学社での講演を一度もおこなっていない。こうした人々に発表の機会を与えたいという気持ちも、石濱にはあったのではないか。

また、すでに長田(2022b)で指摘したように、朝日新聞社が大東亜語学叢刊シリーズの出版を計画したり、メイエの『世界の言語』の翻訳計画があったりしたことも関連すると思われる。しかし、今の時点では朝日新聞社が企画したものなのか、石濱自身が企画して朝日新聞社に持って行ったものなのか、よくわかっていない。この点は今後の課題としたい。

9. おわりに

小論は静安学社の講演者と講演内容を、今の時点で分かっている範囲で列挙することを目的としている。

小論の分析からあきらかになったことは、ネフスキーが参加していた初期の講演と1936年以降の『静安学社一覽』に掲載された講演とではあきらかに内容がちがっているということだ。初期のものには言語学的なものが多いのに対し、一覽掲載のものは中国古典や日本古典に関するものが多い。

また、初期の静安学社は先駆的先見的な目標をもっていた。それは少数民族の居住地に自ら赴き、

フィールド調査による言語学的研究を志向していたことである。消滅の危機に瀕した言語の研究が声高に叫ばれるようになったのはせいぜい 1990 年代以降のことである。その 60 年以上も前に、台湾先住民言語やサハリン先住民言語の研究のために、ネフスキー、浅井、高橋の静安学社創設メンバーがフィールド調査に向かったということは特筆すべきことである。この点を指摘できたことで、小論の目的が十分に達成されたと考える。

小論では静安学社初期の講演と、一覧掲載の講演とを区別してきた。それが静安学社でおこなわれた講演のすべてではない。初期と一覧掲載の時期にはギャップがある。すなわち、1929 年 6 月以降から 1936 年 9 月以前の講演については、まだわかってはいない。この 7 年間の空白は大きい。この時期の講演がどんなものだったのか。またいつまで静安学社が存続していたのか。これらは今後の課題である。小論で静安学社の全貌をあきらかにしたとはとうてい言えない。今後も調査を継続していきたい。

参考文献

- 浅井恵倫(1927)「第一回大阪例会記事」『音声学協会会報』5:5。
- 浅井恵倫(1953)「台湾言語学はどこまで進んだか」『民族学研究』18(1-2):12-19。
- 浅井恵倫(1969)「新村先生の追憶」『言語研究』54:12-13。
- 吾妻重二(2017)「泊園書院出身の東洋学者たち」吾妻重二編『泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈』関西大学出版部。183-209 頁。
- 吾妻重二(2019)「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」吾妻編。9-23 頁。
- 吾妻重二編著(2019)『東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部。
- 生田美智子編(2003)『資料が語るネフスキー』大阪外国語大学。
- 石田幹之助(1936)「新刊紹介：浅井恵倫「紅頭嶼に行はれるインドネシア語=ヤミ語の研究」」『民族学研究』2(2):523-525。
- 石濱純太郎(1942)「序」高橋盛孝『樺太ギリヤク語』朝日新聞社。III-XII頁。
- 石濱純太郎編(1938)『大阪漢学大会研究会』典籍之研究社。
- エヴァンズ、ニコラス。大西正幸・長田俊樹・森若葉訳(2013)『危機言語：言語の消滅でわれわれは何を失うのか』京都大学学術出版会。
- 大阪外国語大学 70 年史編集委員会編(1992)『大阪外国語大学 70 年史』大阪外国語大学 70 年史刊行会。
- 大阪外国語大学同窓会 50 周年記念誌編集委員会編(1972)『きんきら 50 年—大阪外国語大学同窓会 50 周年記念誌』大阪外国語大学同窓会。
- 大阪静安学社(1927)『静安学社通報』第一期
- 大阪静安学社(1932)『静安学社一覧【昭和七年】』
- 大阪静安学社(1933)『静安学社一覧【昭和八年】』
- 大阪静安学社(1934)『静安学社一覧【昭和九年】』
- 大阪静安学社(1935)『静安学社一覧【昭和十年】』
- 大阪静安学社(1936)『静安学社一覧【昭和十一年】』

- 大阪静安学社(1937)『静安学社一覽【昭和十二年】』
- 大阪静安学社(1938)『静安学社一覽【昭和十三年】』
- 大阪静安学社(1939)『静安学社一覽【昭和十四年】』
- 大阪静安学社(1940)『静安学社一覽【昭和十五年】』
- 大阪静安学社(1941)『静安学社一覽【昭和十六年】』
- 岡崎精郎(1979)「大阪東洋学会より静安学社へ—大阪學術史の一こまとして—」森三樹三郎博士公寿記念事業会編『森三樹三郎博士公寿記念東洋学論集』朋友書店。1383-1402頁。
- 岡崎精郎(1986)「西田長左衛門先生を憶う」旧制浪速高等学校60周年記念誌編集委員会編『浪高60年』旧制浪速高等学校同窓会。179-182頁
- 長田俊樹(2013)「あとがき」エヴァンズ『危機言語：言語の消滅でわれわれは何を失うのか』京都大学学術出版会。473-479頁。
- 長田俊樹(2021)「大阪言語学会要覧について」『KOTONOHA』228:1-19。
- 長田俊樹(2022a)「大阪言語学会会報について」『KOTONOHA』230:1-32。
- 長田俊樹(2022b)「石濱シューレに集う人々—四半世紀後に」『日本研究』64:123-158。
- 長部和雄(1943)「白衣会に就て」『史林』28(1):58-79。
- 加藤九祚(1976)『天の蛇：ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社。
- 加藤九祚(2011)『完本天の蛇：ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社。
- 北村信昭(1983)『奈良いまは昔』奈良新聞社。
- 近藤治(1993)「岡崎精郎教授の逝去を悼む」『東洋文化学科年報』8:23-25
- 堺市編(1931)『堺市史第八巻 索引・年表編纂沿革』堺市役所。
- 澤田瑞穂(1988)『中国の伝承と説話』研文出版。
- 邵艶(2004)「戦前日本の高等教育機関における中国語教育に関する研究：大阪外国語学校と天理外国語学校を中心に」『神戸大学発達科学部研究紀要』12(1)：189-214
- 高田時雄編(2018)『石濱純太郎 続・東洋学の話』臨川書店。
- 高橋盛孝(1929)「南樺太ギリヤク族調査紀要」『民族』4(2):20-27。
- 高橋盛孝(1936a)「ギリヤク族の民譚」『昔話研究』2(1):9-14。
- 高橋盛孝(1936b)「ギリヤク族の民譚」『昔話研究』2(2):20-27。
- 高橋盛孝(1942)『大東亜語学叢刊 樺太ギリヤク語』朝日新聞社。
- 高橋盛孝(1952)「近文アイヌの伝承」『関西大学文学部論集』2(1):9-48。
- 丹菊逸次(2018)「高橋盛孝採録ニヴフ伝統歌謡の詩連と押韻形式」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20:113-125。
- 塚本善也(2014)「なぜネフスキイは台湾・ツォウ族村へ出かけたのか：『ツォウ語方言資料』成立前史」中村唯史編『ロシアの南：近代ロシア文化におけるヴォルガ下流域、ウクライナ、クリミア、コーカサス表象の研究』山形大学人文学部。95-127頁。
- 土田滋(1970a)「故浅井恵倫教授とオーストロネシア言語学」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』10:2-4。
- 土田滋(1970b)「浅井恵倫教授著作目録 訂正及び補遺」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』11:19。

- 土田滋(1984)「人と学問 浅井恵倫」『社会人類学年報』10:1-28。
- 東京帝国大学(1939)『東京帝国大学卒業生氏名録』東京印刷。
- 堂谷憲勇(1939)「歴代名畫記論攷」『美術研究』8(6)(90):1-10。
- 堂谷憲勇先生遺芳編集委員会編(1978)『堂谷憲勇先生遺芳』堂谷憲勇先生遺芳刊行会。
- 豊原治郎(1973)「長部和雄教授の学風」『人文論集』9(1-2):25-31。
- 中里見敬・中尾友香梨(2009)『濱一衛と京劇展：濱文庫の中国演劇コレクション』九州大学附属図書館。
- ネフスキー・岡正雄編(1971)『東洋文庫 185 月と不死』平凡社。
- 桧山真一(2003)「静安学社のロシア人たち」『日本語日本学研究』5:21-34。
- 丸山正三郎(1987)「財津愛象先生の思ひ出」『懐徳』56:104-109。
- 三浦周行監修(1930)『堺市史第二卷本編』堺市役所。
- ムーナン。佐藤信夫訳(1974)『二十世紀の言語学』白水社。
- 森下修一郎(1972)「ポーネル先生の想い出」大阪外国語大学同窓会編『きんきら 50 年』125-126 頁。
- 善峰憲雄(1990)『中国史管見—古稀記念 善峰先生論作輯—』龍谷大学東洋史学研究会。
- 劉麟玉(2013)「民族音楽学者榊源次郎再考—日本とインドの間の足跡を辿る」『奈良教育大学紀要：人文・社会科学』62(1):97-104。
- 渡辺正勇(1973)「加恵静雄君を惜しむ」『弘道』82(847):25-27。

Asai Erin (1936) *A study of the Yami language, an Indonesian language spoken on Botel Tobago island*, Leiden.

Bohner, Hermann (1935) *Jinno-Shoto-ki: Buch von der Wahren Gott-Kaiser Herrschafts-Linie*. 2 vols. Tokyo.

Bohner, Hermann (1938) "Hanazono Tennō, Taishi wo Imashimuru no Sho, 'Mahnung an den Kronprinzen.'" *Monumenta Nipponica* 1(2): 317-49.

Bohner, Hermann (1940) "Wake-no-Kiyomaru-den." *Monumenta Nipponica* 3(1): 240-73.

Scheid, Bernhard (2013) "In search of lost essence: Nationalist projections in German Shinto Studies", In: Bernhard Scheid (ed.), *Kami Ways in Nationalist Territory: Shinto Studies in Prewar Japan and the West*. Vienna: Austrian Academy of Sciences Press. 237-264.

Wachutka, Michael (2012) "A living past as the nation's personality : jinno shotoki, early Showa nationalism, and das dritte Reich", *Japan Review* 24:127-150.